

## 私のおすすめ本

片岡純也 専任講師  
(経営学)

『コンテナ物語 世界を変えたのは「箱」の発明だった (増補改訂版)』 マルク・レビ  
ンソン著, 村井章子訳

日経 BP 2019 年

日本国内だけでなく、世界全体での物の輸送量はどんどん増えています。皆さんも Amazon などの通販サイトで、いろいろな商品を買っていると思います。また、トヨタのような日本の企業も、国を越えていろんな国から部品を仕入れ、それを使って製品を作っています。このように、世界中で大量の物が常に運ばれているのです。特に驚くべきなのは、その運搬の効率です。Amazon で海外の製品を注文してから、たった数日で自宅に届くこともあります。では、なぜこれほど大量かつ効率的に物を運ぶことができるのでしょうか？その大きな理由の一つが「コンテナ」です。

コンテナを使うことで、なぜ効率的に運べるのかというと、その理由は「標準化」にあります。コンテナのサイズや仕様が世界中で統一されているので、どの国でも同じコンテナが使われています。この効率化の効果は、むしろ「もしコンテナのサイズがバラバラだったらどうなるか」を想像するとわかりやすいでしょう。大量の荷物を処理するためには、コンテナを積み重ねる必要がありますが、もしコンテナのサイズがすべて違っていたら、積み重ねるのがとても難しくなってしまいますよね。さらに、港に届いたコンテナは、そのまま中身を出さずに列車で輸送することができます。これも、コンテナが標準化されているからできることなのです。

これらを踏まえると、現在の視点からはコンテナの標準化のメリットは極めて大きいことがわかります。だからこそ、「みんなで共通のコンテナを使おう」という決まりも簡単にできたように思うかもしれません。しかし、実際にコンテナの規格を標準化するプロセスは、そんなに簡単なものではありませんでした。標準化は一気に広まったのではなく、少しずつ広がっていったのです。

この本は、そのプロセスを丁寧に書いた作品です。誰が、どのような理由で標準化を進めたのか、また、標準化を進める上での障害は何だったのかなどが詳しく書かれています。そのため、企業経営に興味がある人にとっては、ノンフィクションとしてとても興味深い内容となっています。しかし、この本の価値はそれだけではありません。「イノベーションが広がるプロセス」という観点から読んでも面白いでしょう。良いものだからといって必ずしも売れたり広まったりするわけではない、その理由を考えるヒントにもなるはずです。

もう1冊おすすめしたい本は、私の研究分野である「社会ネットワーク」についての本です。「社会ネットワーク」という言葉は、あまり聞いたことがないかもしれません。これは、人と人とのつながりを線で結ぶことで、ネットワークとして考えるものです。例えば、皆さんも自分の周りの人とのつながりを線で結んでいくことで、自分の周りの社会ネットワークを作ることができます。「普段、誰とよく話すか」や、「自分と仲の良い人同士も仲がいいか」などを考えることで、自分の人間関係をネットワークとして見るができるのです。

では、なぜ人間関係をわざわざネットワークとして考えるのでしょうか。それは、社会ネットワークを使うと、直感に反するような面白い現象がいろいろと見えてくるからです。以下で簡単に説明します。

例えば、総理大臣に知り合いの紹介を通じて会いたいとしましょう。この場合、何人の知り合いを経由する必要があると思いますか。ごく一部の人を除けば直接会うことができる人は少ないでしょうし、総理大臣の知り合いを知っている人も少ないでしょう。このように普通に考えると、かなり多くの人を介さなければならないと思いがちです。しかし、アメリカでの実験によると、たった6人の知り合いを介するだけで総理大臣も含めほとんどすべての人に会うことができると言われています。これを「六次の隔たり」と呼びます。

また、転職機会など自分にとって有用な情報は、普段よく話す人とたまにしか話さない人のどちらから得ることが多いのでしょうか。直観的には普段よく話す人から得ることが多いと思うでしょう。しかし実際にはたまにしか話さないの方が有用な情報を提供してくれる可能性が高いといわれています。これを「弱いつながりの強さ」と言います。

どちらの現象も皆さんの直感に反するものだと思いますが、社会ネットワークを使うことで説明ができます。詳しい説明は紙幅の都合上省きますが、ぜひ『遠距離交際と近所づきあい』を読んでみてください。この本には、他にもたくさん面白い事例が載っています。この本を読むことで社会ネットワークの重要性や意義、役割について学ぶことができます。またそれを通じて社会ネットワークに興味を持ってもらえれば幸いです。

### ◎ 2冊のおすすめポイント

読んだ後「なるほど」と納得することができ、また発想を広げる契機になるような本です。

### 筆者自己紹介

片岡 純也 (かたおか じゅんや)

現在は経営学と現代企業論を担当しています。主な研究関心はイノベーションで、特にどのような人が画期的なアイデアを生み出すためにどのような経験を積んでゆけばよいのかという点に興味をもって研究をしています。